

令和の先生

2022・12・20 重枝 一郎

私はよく80年代「昭和」の歌謡曲が流れる定食屋に行く。なぜか？それは曲を聴くと学生時代にタイムスリップするからである(笑)。そんな話はどうでもいい話である。何が言いたいかというと「令和の先生」の話をする。

今の中教審答申は、目指す学校教育の姿として、すべての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」をICTも活用しながら実現することを掲げている。その中核を担う私たち「教師」については「環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続け、子ども一人一人の学びを最大限に引き出し、**主体的な学びを支援する伴走者**」という表現で伝えている。知識・技能の単なる伝達者にとどまらず、一人一人の主体的な学びを見守り、声をかけ、誘い、励ます・・・そんなイメージだろうか。

この「伴走者」というワードで思い浮かべたのは、本校のシンボルワード「**大切なひとり**」であった。本校の先生方の生徒に寄り添う姿は、まさに「伴走者」というにふさわしい姿と思った。担任でも、教科担当者でも、生徒に寄り添うことに多くの時間を割いている。多様な個性をもち、成長に伴ってその個性を多岐にわたって伸長していく生徒一人一人にゴールまで「伴走」することは容易ではない。本当に多くの時間が必要である。これからはその「伴走」を学校全体でより効果的、効率的にすすめるためにICTを活用することにもなる。

一方で思うのは、「伴走」は、時間的なことだけでなく、内容が多様であることから私たちに難しさを与えることも増えると思う。時に「伴走」することに悩み疲れる先生も出てくると思う。そんな時は、同僚に話したり、スクールカウンセラーに話したり、嫌でなければ私に話したりし、心に余裕をつくってほしい。それは、先生方がグットパフォーマンスで生徒に接するために必要なことである。

「令和の先生」が、「伴走者」であることと併せてもう一つ求められるのが「学びのモデル」なることと言われる。中教審後に示された「教師の在り方特別部会」において「主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデル」であることが求められている。子どもが「主体的、協働的」に学ぶことと同様に、私たち教師もその姿に**「学びのモデル」**を求められている。その教師の姿を生徒に波及させてほしいということである。

私は先生方が好きなことをすることがそれにつながっている。例えば、落合先生が大学院で新しいことを学んだり、鶴原先生がサッカーでオーバー60の大会で活躍したり、音楽科の先生が自身でコンサートに出たり、そういうことがいいと思っている。それは以前書いた「教師の勢力資源（校長研修だより81号）」にもつながる。

私たちは、「伴走者」であり「学びのモデル」でもある「令和の先生」を目指す。しかしそんなことは昔から変わらないとも言える。どの先生もわかっている。

そこで思うのは、私たちは個人として、いったい何人の生徒にいつ、どこで、どうやって「伴走」するのか。その傍らで、いつ、どこで、どうやって「ロールモデル」としての学びを続けるのかということである。つまり時間的余裕のこと、心の余裕のことである。現状では多少無理をしないとそんな余裕はないと聞こえてきそうである。私はこの「令和の先生」を目指すには、ヒト・モノ・カネがこれまで以上にかかると思っている。国もそれはわかっている。私たちもわかっている。現実が厳しくても、これからもポジティブマインドは失わないでいきたい。

2学期も先生方のおかげで無事に終業日を迎えることができました。
本当にありがとうございました。